下坂　守著

『中近世祇園社の研究』

河内将芳

本書は、中世延暦寺研究・中世絵画分析研究などの第一人者として知られる下坂守氏の第四論集である。第一論集は二〇〇一年に刊行された『中世寺院社会の研究』（思文閣出版）、第二論集は二〇〇三年に刊行された『描かれた日本の中世―絵画分析論―』（法藏館）、第三論集は二〇一四年に刊行された『中世寺院社会と民衆―衆徒と馬借・神人・河原者―』（思文閣出版）だが、いずれも学界において高い評価を得た書として知られるとともに、最新の研究においても、かならずといってよいほどに参照される必須の書として名が通っている。本書もまた、それにつらなるであろうことはうたがいないところといえよう。

本書の研究対象である八坂神社（祇園社）について、これまで知られてきた単著といえば、久保田収著『八坂神社の研究』

（神道史学会、一九七四年）があげられる。また、一般書としても、高原美忠著『八坂神社』（学生社、一九七二年）や八坂神社編『八坂神社』（学生社、一九九七年）が知られているが、本書はこれらの成果をうけついだうえで、研究状況を格段に前進させた一書というのが評者のいつわらざる印象である。今後、祇園社（八坂神社）に関心をもつものにとっては、研究の道しるべになると同時に、乗りこえていかなければならない泰山としてそびえたちつづけることになるにちがいない。そのような泰山を紹介できるような能力をもとより評者はそなえていないが、あえて蛮勇をふるい、その責めを少しでもふさぐことができればと思う。それではまず、本書の構成を紹介することからはじめよう。

序にかえて

第一部　祇園社の組織と社殿修理

第一章　祇園社・同社御旅所の役職歴代

第二章　絵画史料に見る祇園社の神子

—描かれた片羽屋と片羽屋神子—

第三章　近世における祇園社の社殿修理

第二部　祇園会と祇園御旅所

第一章　神宝「勅板」について

第二章　神宝「勅板」と祇園会

第三章　近世祇園御旅所考

第三部　祇園社と四条河原

第一章　中世「四条河原」再考

第二章　「四条河原」芝居地に関する一考察

第三章　近世初頭の鴨川河原の風景—霊洞院蔵「境内並近隣之古記」および建仁寺蔵の古絵図・古文書の紹介と分析—

第四章　中近世「坂」の領域と風景

第四部　祇園社境内の町とねりもの

第一章　近世祇園社境内における「新地」成立過程の研究

第二章　祇園社境内祇園町・新地六町の研究—祇園「遊所」の成立と展開—

第三章　祇園社と神輿洗いねりもの—祇園町・新地六町の祇園会—

第四章　安政六年の「祇園御千度さとの賑ひ」—祇園町・新地六町の「御千度ねりもの」—

史料編

史料編1　清水寺門前茶屋史料（清水寺蔵）

史料編2　嘉永四年遊女屋商売再興史料（八坂神社蔵）

史料編3　祇園社境内町ねりもの史料（八坂神社蔵）

むすびにかえて

右にあきらかなように、全体は、「第一部　祇園社の組織と社殿修理」「第二部　祇園会と祇園御旅所」「第三部　祇園社と四条河原」「第四部　祇園社境内の町とねりもの」「史料編」の五部に分かれている。その内容は、祇園社の組織研究にはじまり、祇園会と御旅所の関係、そして祇園社境内地である「四条河原」や「境内の町」（祇園町・新地六町）の成立、さらには「境内の町」において展開をとげた「遊所」で営業する茶屋・遊女屋による「神輿洗いねりもの」など、時代の幅も広く、かつ多岐にわたるものとなっている。もっとも、各部はたがいに密接にむすびついており、そのうえで「中近世祇園社」の実像がうかびあがってくるという構成になっている。したがって、定石にしたがうなら、各部を詳細に紹介しつつ、全体へとすすんでいかなければならないわけだが、ここでは評者の能力と紙幅の都合から、「第二部　祇園会と祇園御旅所」を中心に紹介をおこないたいと思う。この点、著者ならびに読者にはあらかじめおゆるしを乞いたいと思う。

さて、本書「序にかえて」でもふられているように、一般に「祇園会（祇園祭）の濫觴は」、「貞観十一年の疫病の退散を祈願して執行された御霊会にまでさかのぼると伝え」られている。しかしながら、おそくとも鎌倉時代末期に伝えられていた祭礼の濫觴とは、天延二年（九七四）六月一四日に「御霊会」がはじめておこなわれ、そして、「高辻東洞院方四町」が「旅所の敷地」として寄附され「大政所」とよばれるようになったというものになる（『社家条々記録』）。第二部におさめられた諸論考は、この大政所御旅所をめぐって検討が加えられたものだが、それらによって、「勅板」とよばれる神宝に天延二年の伝承が記されることがあきらかにされるとともに、大政所御旅所ならびに秀吉によって移転させられた近世祇園御旅所（とりわけ北御旅所）にかかわる人びとの軌跡が膨大な新史料をふまえて克明に跡づけられることになる。いずれもこれまでまったく知られてこなかった事実ばかりであり、中近世祇園御旅所の研究は飛躍的に進歩をとげたということができるであろう。

とりわけ「勅板」（「御札」とも）「の護持主体がかつては「とミくはり」とも「降屋」とも呼ばれた七人の」「大政所神主家（秦家）」の「末裔であった」ことが解明された点は、「勅板」が現在でもなお神輿渡御に供奉している事実をふまえたとき、祇園会の歴史の根幹にかかわるという意味においてきわめて重要といえる。また、元和三年（一六一七）に降屋が追放されたのち、御旅所を管理・運営をになった宮仕家（大和家）と宮守家（津田・藤井両家）がともに「「大政所神主」という役職を得ることにこだわっ」ていくようすもあきらかにされていく。それはとりもなおさず、祇園会にとって大政所御旅所が不可欠な要素であったことをあらわしていよう。このように本書においてあきらかにされた諸事実は、中近世祇園会の歴史そのものを考えていくうえで土台となることばかりであり、この第二部を瞥見するだけでも、本書の重要性はきわだっている。ぜひ実際に手にとって、著者の圧倒的な叙述力にふれていただきたいと思う。

（かわうち・まさよし　奈良大学文学部教授）

（A5判、七八二ページ、一九八〇〇円、法藏館、二〇二一・七刊）